

編 集 後 記

新年明けましておめでとうございます。「臨床神経学」の読者の皆様には、新たな希望を胸に新春を迎えられたことと存じます。

「臨床神経学」は本年2020年に60巻を迎えました。学術大会も昨年大阪大会が第60回でしたので、時をほぼ同じくして臨床神経学も還暦を迎えるわけです。ただ、細かく見ると、学術大会は2019年が60回ですが、臨床神経学は2020年が60巻で1年ずれています。学会誌が1年遅れて始まったのかな？と調べてみました。このような調査も2018年に臨床神経学過去論文の全PDF化がなったのですぐに完遂できるようになったことは最近の大きな進歩です。そうすると臨床神経学の第1巻第1号が1960年の10月に発刊され、1961年中までの5号が1巻とされたためにずれが生じたことがわかりました。学術大会の方は同じ1960年4月に第1回日本臨床神経学会が開かれていますので、両者のスタートは同一年だったのです。記念すべき創刊号の巻頭は勝沼精蔵先生の『「臨床神経学」の発刊にあたりて』という文章で、神経学が独自の学問として走り出した時代の熱気が伝わってきます。60年を経た今、神経学も、神経学会も、そして学会誌も新たなスタートを切らないといけないと身の引き締まる想いです。60巻の巻頭には葛原茂樹先生の「日本神経学会創立（1902）から116年—歴史に学び教訓を未来に活かす」という、まさに

時宜を得た総説が掲載されましたので皆様是非ご覧になって下さい。

本誌がオープンアクセス可能な完全電子ジャーナルとしてスタートして既に5年が経過しました。アクセス数は年々増加しており、2018年11月～2019年10月は5,685,431件で、昨年度の4,869,923件からさらに増えました。2019年度の新規投稿数は11月末の時点で92編と昨年同時点より9編増加、採択判定までの平均所要日数は57.3日と昨年より約12日短縮しました。近年レベルの高い論文は英文でという志向があるのは当然で、かつ、神経学会としては英文誌 *Neurology and Clinical Neuroscience* の発展を目指すことも重要課題です。そのような状況では臨床神経学の若干の投稿数減少も仕方ないかと思いましたが、逆に増加傾向に転じたことは嬉しい誤算です。若者の論文執筆の練習の場として大いに活用されていることがひとつ、またPubMedに収載され続けていることが、翻訳ソフトの発達による言語の壁の低減も相俟って利点と認識されてきたことももうひとつの理由かと思われます。2018年末より始めた総説の掲載も順調に進行しており、学会誌へのアクセスをさらに押し上げる要因となることが期待されます。次の60年に向けての新たなスタートを切ることができたのではないかと感じています。

(園生 雅弘)

〈 編 集 委 員 〉

編集委員長 園生 雅弘 編集副委員長 高尾 昌樹
 編集委員 荒木 信夫 飯塚 高浩 池田 昭夫 亀井 聡 古賀 政利
 鈴木 匡子 坪井 義夫 西野 一三 星野 晴彦
 編集委員(幹事兼任) 小野寺 理 新野 正明 三澤 園子

「臨床神経学」	第60巻 第1号	2020年1月1日発行	
編 集 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		一般社団法人日本神経学会
発 行 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル		戸 田 達 史
印 刷 所	〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入		中西印刷株式会社

発 行 所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
 日 本 神 經 学 会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>